

明治八年
新錦開禹

可憐母志敷女房の
尻河惣公儀太夫死
後、東京本所緑町四丁目
九番地の村上竹藏の玄房ある坂田
熊吉といふ者と密通かせと察せり
確見もせし殊又子も有中と極置
辛起つまに引て、心強く女房を無理に
離縁せしむべ、せんあつても去伏遣
以後、かかを熊吉と、話、勿論同席も、
堅く、あつても、承知、かか、脚も、
熊吉の手と曳て、急の闇夜のくさ身、
暗、氣、行道、あつても、見、當り、
竹藏の直き心も、せ、く、ま、ら、



略誌
芳瀧
阿波文版

60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90

